

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

へいせい ち しん かん しゅうこう てんじ うんりゅうもんぞんせいりん かじきろう ごう しん
 平成知新館1F-6(漆工)に展示されている「雲龍文存星輪花食籠 1合(清時代 18世紀)」について勉強してみよう。

はくりよく
 カラフルで迫力満点
 こうてい
 皇帝のごちそう入れ



うんりゅうもんぞんせいりん かじきろう ごう
 雲龍文存星輪花食籠 1合 京都国立博物館蔵

このゼリー型のような花形のうつわは、直径が46cmもある巨大な入れものです。龍が描かれていますね。日本のおとなりの大きな国、中国で作られました。中国ではかつて、皇帝という絶大な力をみとめられた特別な人物が国をおさめていました。皇帝の「皇」は美しく大きなこと、「帝」は善い行いによって天と一体であること、といわれています。国の君主はこうあるべき、という理想がこめられたことばです。そして龍は、この皇帝を象徴する想像上の動物でした。

龍は、ふだんは水のなかに住んでいて、「そろそろ雨をふらせるべきころだな」と思ったときに天空にむかってのぼって行き、雨をふらすと信じられていました。雨をふらせおわるとまた地上にむかってくだってきて、水のなかにひそむのです。古代の中国では、こんなふうな龍が天地を行き来してお天気をコントロールしていると考えられていました。お天気は現代でもなかなか思うようになりませんよね。てるてるぼうずを作っても雨がふるときはふってしまうし、反対に、雨がふってほしいのにじゅうぶんふらなくて作物が育たなかったり・・・。天候を思いどおりにできるということは、自然界を意のままにあやつれる偉大な力をもっているということです。そのために龍は、中国の皇帝、

すなわち偉大で美しく、善い行いによってこの世界をおさめるべき君主の、シンボルマークとなったのです。



雲龍文存星輪花食籠 部分

ところで、この大きな入れもの、何を入れたかわかりますか？正確なところは私も知らないのですが、宮廷のごちそうを入れたのだそうです。「食籠」とは食べもの入れという意味です。皇帝の暮らす宮殿のパーティーでは、このような食籠がたくさんならんでいたことでしょう。蓋の天板に5匹、周囲に16匹の龍がならんでいますが、このほかに、どんな文様が描かれているのでしょうか？天板の周囲やうつわの高台には、雷文のふちどり（中華料理屋さんの食器の文様でときどきみかけますね！）、龍のまわりには円い玉に炎がからんだ図、蓋とうつわの合うところには蝙蝠と雲、うつわの側面には大海原に浮かぶ岩山に、当たって砕ける波しぶきなどが、勢いよく描かれています。炎のからむ玉は宝珠といって、どんな願いもかなえてくれる魔法の玉です。蝙蝠は、西洋では吸血鬼と結びつくような恐ろしいもののように考えられましたが、中国ではまったく逆に、幸福のイメージでした。それは、蝙蝠の「蝠」の字が幸福の「福」の字と同じ発音で読まれたからで、一種のことば遊びのようなものですが、縁起かつぎをととても大切にされた中国の伝統では、衣服や工芸品のおめでたい文様として盛んに用いられました。

さいごに、このうつわのかざり方も観察してみましよう。あざやかな朱色の漆を背景に、文様の細かな線が彫りこまれていて、その線に金箔が埋めこまれています。金のはげ落ちてなくなっているところもありますが、蓋の周囲の龍のうろこなどは、まだキラキラと光っています。文様にはオレンジ色の漆や茶色っぽい漆、緑色の漆も使われていますね。さらにはグラデーション効果が出るように、二色のあいだをぼかしたりもしています。じつににぎやかな色使いです。漆という塗料は、ひとたび固まると、熱湯にも塩分にも酸にも強いので、木製の食器を塗るのにととても好都合なのですが、そのままではうすいキャラメルソースのような茶色っぽい半透明の色なので、はなやかさに欠けてしまいます。そこで、顔料という絵の具を交ぜてカラフルにしたいのですが、むかしの自然素材の顔料では見映えのよい色を得られる組み合わせが限られていて、黒、朱、そのふたつを交ぜた茶、オレンジ色っぽい黄色、緑、の五色しか出せないという弱点がありました。しかし、このうつわはそのすべてをうまく活用してフルカラーのはなやかな画面を実現しています。このような多色の漆で描いた文様に金を埋めこんだ溝を刻む方法を、現代の日本では「存星」と呼んでいます。「存星」ということばは、かつてほかのかざり方をさしたこともあり、少しややこしいのですが、このうつわのような多色の絵と金の線を組み合わせた方法は、中国の明時代から清時代にかけて盛んに作られて、日本でもいかに外国製らしい高級品として大切にされました。

皇帝のごちそうを入れるのにふさわしい、色も形も文様も、大迫力の食器ですね。

（学芸部 永島明子）